

多良間島のアクセント規則を再検討する

松 森 晶 子

1. 問題提起—多良間島アクセントの謎

Matsumori (2001)、および松森 (2010) は、次のようなデータにもとづき、それまで2型アクセント体系を持つとされていた宮古諸島の多良間島が、3型アクセントを持っていることを指摘した。

- (1) kara (奪格：～から) が付加した場合 → 「～から出す、～から来る」のような文で
- a. kaR kara (井戸から) fucI kara (口から) gama kara (洞窟から) sjudi kara (袖から)
 - b. jaR ka]ra (家から) bata ka]ra (腹から) jama ka]ra (山から) aVva ka]ra (油から)
 - c. i]M kara (海から) fu]ni kara (舟から) gu]ki kara (桶から) sjoR]ki kara (箆から)
- (2) mai (並列：～も) が付加した場合 → 「～もある、～も見える」のような文で
- a. puR mai (帆も) kadi mai (風も) gama mai (洞窟も) kifusI mai (煙も)
 - b. kiR ma]i (木も) mugI ma]i (麦も) jama ma]i (山も) aVva ma]i (油も)
 - c. gu]R mai (暗礁も) pi]ra mai (窺も) ti]da mai (太陽も) uma]cI mai (火も)
- (3) gami (到格：～まで) が付加した場合 → 「～まで行く」のような文で
- a. kaR gami (井戸まで) gama gami (洞窟まで)
 - b. jaR ga]mi (家まで) jama ga]mi (山まで) cIkI ga]mi (月まで)
 - c. gu]R gami (暗礁まで) i]M gami (海まで) fu]ni gami (舟まで)
mina]ka gami (庭まで)

多良間島方言では、原則的に2モーラの長さを持つ助詞 kara (奪格：～から)、mai (並列：～も)、gami (到格：～まで) を名詞に後続させると、(1)～(3) に見られるように、3種の型の違いが明瞭に出現する。これらの例における下がり目の位置を予測するために、松森 (2010) は、次のような一般化を行った。

(4) 多良間島のアクセント規則 (松森2010: 496-7)

- a 型 (「帆、風、畳、煙」などの名詞が示す型) は、文節全体を通して急激なピッチの下降がない平坦な音調型を持つ。
- b 型 (「木、麦、油、俵」などの名詞が示す型) は、付加した助詞内部 (原則的に次末音節、1音節助詞には1拍目) に下降が生じる。
- c 型 (「蚤、鍋、椀、火」などの名詞が示す型) は、当該の名詞内部 (原則的に次末音節、1音節語には1拍目) に下降が生じる。

この(4)の一般化は、名詞の後ろに助詞が連続した場合のアクセントの位置も予測できる。(以下、青井2012の記述方法に従い、日本語訳の際には、焦点のduはカタカナのゾで表記することとする。)

たとえば到格のgami (~まで) に焦点を表すduが付いた助詞連続 gami+duが名詞に後続すると、a型にはgama gami du (洞窟までゾ) のように文節全体が平坦な音調型が出現するのに対し、b型ではjama gami]du (山までゾ) のように助詞部分にピッチの上がり目が生じ、c型はfu]ni gami du (舟までゾ) のように、当該の名詞内部に上がり目が生じる。これらも(4)の一般化で説明できる。次の(5)や(6)の例にも同様なことが言える。

(5) 各型の名詞にkara+du (奪格助詞kara+焦点のdu) が後続した場合

→ 「洞窟からゾ出る」「臼からゾ出す」のような文で

- a. gama kara du (洞窟からゾ) Nnagu kara du (砂からゾ)
b. paru kara]du (畑からゾ) maFfa kara]du (枕からゾ)
c. fu]ni kara du (舟からゾ) maka]L kara du (椀からゾ)

(6) 各型の名詞にniR+du (具格助詞niR+焦点のdu) が後続した場合

→ 「手でゾ作る」「舟でゾ行く」のような文で

- a. paR niR du (葉でゾ) kabI niR du (紙でゾ) piL niR du (にんにくでゾ)
b. tiR niR]du (手でゾ) pana niR]du (花でゾ) aVva niR]du (油でゾ)
c. pa]L niR du (針でゾ) fu]ni niR du (舟でゾ) kata]na niR du (包丁でゾ)

しかしながら、実は(4)の一般化には重大な問題点があり、誤った結果を予測してしまうケースがある。その最大の問題点は、(4)が、b型の名詞から始まる文節において、その名詞に付加した「助詞」の内部にピッチの下降が生じる、としていることにある。

本稿は、松森(2010)の提示した(4)の問題点を指摘するとともに、その修正案を提示することを目的としている¹⁾。

この問題点を把握するにあたっては、まず、(4)の一般化を行った時点において、すでにこれでは記述できない事例があったことを指摘することから始めたい。

1.1. 問題その1：後続の助詞、助詞連続によるアクセント交替（c型名詞の場合）

その問題の事例は、主として、「c型」に分類された名詞の下がり目の位置にあった²⁾。

以下、特定の名詞の「後ろから数えて2つ目」に下がり目が出現する場合を「-2」と表記し、それが語末に出現する場合を「-1」としながら議論を進めたい。

たとえば、mina]ka（庭）というc型の名詞は、mina]ka mai（庭も）、mina]ka kara（庭から）のように、その名詞内部の語末から数えて2つ目、すなわち「-2」の位置（minakaのnaの部分）に下がり目が出現することを原則とする。これは、(4)の一般化の予測する通りである。しかし、同じ名詞にNkeR du（向格助詞NkeR+焦点のdu）が後続すると、minaka]NkeR du（庭にゾ）となり、その下がり目がminakaという名詞の語末、すなわち「-1」の位置に移動する。このように、c型の名詞に特定の助詞や助詞連続が後続すると、その下がり目の位置がなぜか後ろのほうにずれる、という現象が、この多良間方言には観察されていた。

次の(7)は、そのc型に分類された名詞に出現するピッチの下がり目の位置の移動を例示したものである。(7a)のように、mai（～も）を後続させて「～もあるmai aL」という文の中で発音してもらうと、c型名詞に出現する下がり目は、その単独形の下がり目の位置と同じく、当該の名詞の「-2」の位置に出現する。これは(4)の予測する通りである。

ところが、同じ名詞に向格のNkeRを付け、「～に入れる～NkeR ZzjiL」「～に行く～NkeR ikI」「～に漬ける～NkeR cIkIL」のような文に入れて発音してもらうと、その下がり目の位置が「-2」ではなく、当該の名詞の「-1」の位置にずれてしまう。このことは、(7b)の例から分かる。

(7) 後続する助詞（助詞連続）の違いによるアクセント交替（その1）→

c型の名詞に向格助詞NkeRが続いた場合

| a. 「-2」に下がり目がある場合 | ～ | b. 「-1」に下がり目がある場合 |
|----------------------------|---|-------------------|
| fu]ni（舟）、fu]ni mai（舟も） | ～ | funi]NkeR（舟に） |
| gu]ki（桶）、gu]ki mai（桶も） | ～ | guki]NkeR（桶に） |
| i]M（海）、i]M mai（海も） | ～ | iM]NkeR（海に） |
| maR]sju（塩）、maR]sju mai（塩も） | ～ | maRsju]NkeR（塩に） |
| mina]ka（庭）、mina]ka mai（庭も） | ～ | minaka]NkeR（庭に） |
| maka]L（椀）、maka]L mai（椀も） | ～ | makaL]NkeR（椀に） |

次の例は、多良間方言の3種類の型（a型、b型、c型）の名詞のそれぞれに、この向格助詞NkeRを後続させて発音してもらったものである。この中でc型名詞の場合だけが、(4)から予測される位置に下がり目を持っていないことが注目される（次の例の下線部を参照）。

(8) 3種の各型の名詞にNkeR（向格助詞）が後続した場合→

「山へ行く」「水に漬ける」「鍋に入れる」のような文で³⁾

- a. kaR NkeR（井戸に） sjaki NkeR（酒に） mIzI NkeR（水に） sjudi NkeR（袖に）
 b. jama Nke]R（山に） paru Nke]R（畑に） bata Nke]R（腹に） aVva Nke]R（油に）
 c. guR]NkeR（暗礁に） nabi]NkeR（鍋に） maRsju]NkeR（塩に） sjoRki]NkeR（筈に）

同様な傾向は、その向格助詞 NkeR に焦点標識 du が付いた助詞連続 NkeR du が後続した場合にも観察された。この方言の3種類のアクセント型（a型、b型、c型）を持つ名詞に、この NkeR du を後続させて比較してみると、やはり c 型の下がり目の位置だけが、(4) の一般化からは予測することができない（次の例の下線部を参照）。

(9) 3種の各型の名詞に NkeRdu（向格助詞 NkeR + 焦点の du）が後続した場合

- a. kaR NkeR du（井戸にゾ） fucI NkeR du（口にゾ） sjudi NkeR du（袖にゾ）
 b. jama NkeR]du（山にゾ） paru NkeR]du（畑にゾ） bata NkeR]du（腹にゾ）
 c. guki]NkeR du（桶にゾ） funi]NkeR du（舟にゾ） sjoRki]NkeR du（筧にゾ）

たとえば (9c) の「桶にゾ guki NkeR du」という文節は、(4) に従えばピッチの下がり目が当該の名詞の [-2] の部分（すなわち guki の gu の部分）に出現し、*gu]ki NkeR du のようになることが期待される。しかし実際は、guki]NkeR du のように、下がり目はその名詞 guki の語末、すなわち [-1] の位置に出現している。

これら c 型名詞に NkeR や NkeRdu が後続した場合のアクセント型は、(4) の一般化の「例外」とせざるをえなかった。

次のような例でも、同じことが言えた。(10) の右側に挙げられた例は、とりたての助詞 nu gami + du（焦点）を c 型の名詞に後続させ、「～ばかりゾいる～nu gami du buL」「～ばかりゾある～nu gami du aL」という文の中で発音してもらった場合のアクセント型を示す。左側の (10a) の名詞単独形や、その名詞に助詞 mai が後続した文節において出現する下がり目の位置と対比してみると、その違いがよく分かる。(10b) のように nu gami du が c 型の名詞に後続した場合には、下がり目がなぜか各名詞の [-1] の位置にずれていることが分かる。

(10) 後続する助詞（助詞連続）の違いによるアクセント交替（その2）→

c 型の名詞に nu gami（ばかり）+ du（焦点）が続いた場合

- | | |
|-----------------------------------|------------------------------------|
| a. [-2] に下がり目がある場合 | b. [-1] に下がり目がある場合 |
| wa]R（豚）、wa]R mai buL（豚もいる） | ～ waR] nu gami du buL（豚ばかりゾいる） |
| gu]ki（桶）、gu]ki mai aL（桶もある） | ～ guki] nu gami du aL（桶ばかりゾある） |
| sja]ba（草履）、sja]ba mai aL（草履もある） | ～ sjaba] nu gami du aL（草履ばかりゾある） |
| fusju]L（薬）、fusju]L mai aL（薬もある） | ～ fusjuL] nu gami du aL（薬ばかりゾある） |
| suZ]zja（砂糖黍）、suZ]zja mai aL（砂糖黍も） | ～ suZzja] nu gami du aL（砂糖黍ばかりゾある） |
| nuR]ma（馬）、nuR]ma mai buL（馬も） | ～ nuRma] nu gami du buL（馬ばかりゾいる） |
| poR]kI（箒）、poR]kI mai aL（箒も） | ～ poRkI] nu gami du aL（箒ばかりゾある） |

たとえば、(10b) の poR]kI（箒）という c 型の名詞の下がり目は、単独形で poR]kI（箒）、mai が後続すると poR]ki mai（箒も）となっていることから、当該の名詞の [-2] の直後に生じることが分かる。これは (4) の予測する通りである。これに対して、同じ名詞を「～ばかりゾいる～nu gami du buL」のような文に入れて発音してもらおうと、その下がり目の位置がなぜ

か名詞の語末のほうにずれ、poRkI] nu gami du (箒ばかりゾ) のような型となるのである。

参考のため、この方言の3種類の型(a型、b型、c型)のそれぞれに、この助詞連続nugami+duを後続させた文の文節部分を(11)に挙げる。下線部に注目すると、c型名詞のピッチの下がり目の位置だけが、(4)が予測する[-2]ではなく、[-1]になっていることが分かる。

(11) 各型の名詞にnugami (ばかり)+du (焦点) が後続した場合

- a. tuL nu gamidu (鳥…) ika nu gamidu (鳥賊…) kabI nu gamidu (紙…)
- b. pana nu gami]du (花…) taku nu gami]du (蛸…) aVva nu gami]du (油…)
- c. funi] nu gamidu (舟…) katana] nu gamidu (包丁…) nuRma] nu gamidu (馬…)

このように、c型の名詞には、後続する助詞によって、下がり目の位置がずれてしまうという現象が観察されていたのだが、このような現象がなぜ起こるのかは、(4)の一般化を提示した時点では、不明であった。

さて、(4)では「原則的に次末音節」という言葉が使われていることから分かるように、b型とc型の下がり目の位置がどこにあるかを割り出す際に、「音節」を使用した一般化を行っている。しかしその後、多良間島においては、その下がり目の位置を予測する際には、「モーラ」を使用した一般化を行わなければならないことが判明した。

これは、たとえば(10)のfusju]L (葉)、fusju]L mai (葉も)という例を見るとよく分かる。もし下がり目の実現位置を割り出す際に、語末から数える単位が音節であるとするならば、これらは、*fu]sjuL (葉)、*fu]sjuL mai (葉も)となることが予想されるが、実際はそうっていない。fusju]L (葉)、fusju]L mai aL (葉も…)のような下がり目の位置は、「音節」ではなく「モーラ」で数えないと導き出すことができない。

したがって、以下、この多良間島方言の記述に当たってはモーラを使用して一般化を行うこととする。そして、[-2]という場合には、名詞の語末から数えて2つ目のモーラに下がり目が置かれていることを示し、[-1]という場合には、それが語末のモーラに置かれていることを示すこととする。

以上、c型の名詞は、単独形やkara (奪格：～から)、mai (並列：～も)、gami (到格)、gami+du (到格+焦点のdu)、kara+du (奪格+焦点のdu)、niR+du (具格+焦点のdu)などの助詞や助詞連続が付いた場合には、(4)の予測通り、当該の名詞の[-2]の位置に下がり目が出現するのに対して、NkeR (向格)、NkeR+du (向格+焦点のdu)、あるいはnu gami+du (ばかり+焦点のdu)といった、ある特定の助詞や助詞連続が後続すると、なぜかその下がり目が[-1]の位置にずれる、ということを見てきた。

つまり多良間島方言では、c型の名詞の下がり目の位置が、後続する助詞によって交替するのである。しかしながら、このような下降位置の交替が、どのような条件によって引き起こされるのかという点については、(4)に基づくこれまでの分析では、説明できていなかった。

1.2. 問題その2：長い名詞に出現する下がり目の位置

松森 (2010) の提示した (4) のさらなる問題点は、c 型に分類した名詞のうちの、比較的長い (モーラ数が4モーラ以上の) 名詞の下がり目の位置にあった。まず、次のような4モーラの長い名詞のアクセントを検討してみよう。

(12) 下がり目が [-2] にある4モーラ名詞

aMdi]L (漁の時に使う網籠)、junaga]tu (夜)、jusjara]bi (夕方)、
kiRpa]gI (竹馬)、miMga]mi (耳甕)、sIru]na (汁用杓子)、sItumu]ti (朝)

これらの名詞は、すべてその名詞内部の [-2] のモーラに下がり目を持っている。またこれらに mai や kara などの助詞をつけても、次のように、下がり目の位置は、常にその名詞内部の [-2] のモーラに出現する。

(13) 下がり目の位置が [-2] のモーラにある4モーラ名詞の例

| | | |
|----------------|---|---------------------------------------|
| aMdi]L (網籠) | ～ | aMdi]L mai (網籠も)、aMdi]L kara (網籠から) |
| kiRpa]gI (竹馬) | ～ | kiRpa]gI mai (竹馬も) |
| miMga]mi (耳甕) | ～ | miMga]mi mai (耳甕も) |
| sIru]na (汁用杓子) | ～ | sIru]na mai (杓子も)、sIru]na kara (杓子から) |
| sItumu]ti (朝) | ～ | sItumu]ti mai (朝も) |

したがって松森 (2010) では (4) の予測するところから従って、これらの名詞をすべて「c 型」の名詞として分類した。(この結論が誤りであったことについては、本稿の第4節以降で後述する。) (4) によると、「名詞内部にピッチの下がり目が生じる」ものは、c 型名詞であると一般化されているからである。

ところがこれに対し、同じように名詞内部に下がり目を持ちながらも、その下がり目の位置が [-2] ではなく、それよりもっと前に出現するような語例も多良間島には存在する。次のようなものがそれに当たるが、これらはすべて語末から数えて 4モーラ目 (あるいは3モーラ目) に下がり目を持っていることが分かる⁴⁾。

(14) 下がり目の位置が [-2] より前に置かれた4モーラ以上の名詞の例

ada]NgiR (アダンの木)、gazju]magiR (ガジュマルの木)、
jatu]Rfucu (蓬)、ma]kugaN (ヤシガニ)、Nna]cIkI (杵)、
sImi]zIdiL (芋弁当の籠) (sImi]diLとも)、zjo]RfucI (門)

このような下がり目の位置がどうして生じるのかは、松森 (2010) の提示した (4) の一般化では説明できない。(4) に従うと、(14) に挙げられた名詞の下がり目の位置は、すべて「例外」と見做さざるをえなくなってしまう。

たとえば、同じ「籠」の一種であっても、(12) に挙げられた aMdi]L (漁で使う網籠) は、

その下がり目が（予想通り）語末から2つ目のモーラ、すなわち [-2] の位置に出現している。これに対して (14) に挙げられた sImi]zIdiL (芋弁当の籠) となると、その下がり目の位置が、語末から数えて4つ目、つまり [-4] のモーラに出現している。(後者はsImi]diLと発音される場合もあったが、その場合は、語末から数えて3つ目、つまり [-3] のモーラに下がり目が出現している。) このような違いは、一体どうして生じるのだろうか。(この問題は、第4節で再度取り上げて論じる。)

さらに不思議だったのは、(14) のように下がり目の位置が [-4] や [-3] のモーラにある名詞に限って、(7) や (8) で扱った向格助詞の NkeR を後続させてみても、(7) や (8) の場合とは異なり、その下がり目が語の後ろのほうに移動してはいかないという事実である。

(7) では、c 型の名詞の後ろに NkeR (向格) という助詞が付くと、下がり目の位置が1モーラ分後ろにずれて [-1] となることを見てきた。たとえば、minaka (庭) という c 型の名詞は、原則的に [-2] のモーラ na に下がり目が出現し、mina]ka、mina]ka mai (庭も)、mina]ka kara (庭から) というようになるのだが、同じ名詞に NkeR という助詞が後続すると、minaka] NkeR (庭に) となり、下がり目はその名詞の最終モーラ、つまり [-1] のモーラである ka の部分に移動する。

ところが、(14) に挙げられた長い名詞に限っては、それらに NkeR や NkeR du などが後続しても、その下がり目が後ろにずれてはいかず、常に同じ位置に固定されている⁵⁾。次の例は、それを示している。

(15) 下がり目の位置が特定のモーラに定まって出現する4モーラ以上の名詞

sImi]zIdiL (芋弁当の籠) [-4]、sImi]zIdiL mai (弁当籠も) [-4]、
sImi]zIdiL kara (弁当籠から) [-4]、sImi]zIdiL NkeR du (弁当籠にゾ) [-4]
zjo]RfucI (門) [-4]、zjo]RfucI mai (門も) [-4]、zjo]RfucI kara (門から) [-4]、
zjo]RfucI NkeR du (門にゾ) [-4]

一体なぜ、これらの長い名詞に限って、その下がり目の位置が常に一定の場所に出現し、NkeR du が後続しても、語の後ろのほうへ移動していくことがないのだろうか。

一方、(12) の、下がり目が [-2] の位置にある長い名詞については、(7) や (9) の場合と同じく、NkeR や NkeR du が後続するとその下がり目が [-1] の位置にずれる、という現象が生じる。

たとえば、aMdi]L (網籠) を例にとってみると、この名詞に NkeR や NkeR du を後続させて「aMdi]L NkeR (網籠に)、aMdi]L NkeR du (網籠にゾ)」から始まる文節を作ると、その下がり目の位置が [-1] に移動する。次の例はそれを示す。

(16) 下がり目の位置が後続する助詞によって交替する4モーラ以上の名詞

aMdi]L mai (網籠も) [-2]、aMdi]L kara (網籠から) [-2] ~
aMdi]L NkeR (網籠に) [-1]、aMdi]L NkeR du (網籠にゾ) [-1]

この(15)と(16)の長い名詞のふるまいの違いは、いったいどのような原因によって生じるのだろうか。

(4)の一般化を提示した段階では、以上のような問題点が、依然として未解決のまま残されていたのである。

2. 与那覇方言の分析を手がかりにして

さて、以上に述べてきたような多良間島アクセントの不思議な現象の謎を解く鍵となったのが、松森(2013a, b)で分析した宮古島の与那覇方言のアクセントの仕組みである。

与那覇方言では、名詞、およびそれに続く助詞連続が、それぞれ3モーラ以上の長さになった場合に、次のような2つの型の対立がはっきりと観察される。(この2つの音調型を松森2013a, bは、五十嵐2012にしたがって、それぞれ[AB型]、[C型]と呼んだ。)

(17) 与那覇方言の3モーラ名詞に meR du が後接した場合の音調型 (松森 2013a : 7)

| | | |
|-------|----------------------------|-----------------------------|
| [AB型] | buduI <u>meR du</u> (踊りもゾ) | kagaM <u>meR du</u> (鏡もゾ) |
| | taRra <u>meR du</u> (俵もゾ) | maFfa <u>meR du</u> (枕もゾ) |
| [C型] | <u>aRgu</u> meR du (歌もゾ) | <u>katana</u> meR du (包丁もゾ) |
| | <u>pasaM</u> meR du (鋏もゾ) | <u>fusuI</u> meR du (葉もゾ) |

松森(2013b)では、このようなデータを「音調領域」という概念を提示して説明を試みた。すなわち、「鏡も」「鋏も」という文節は、{kagaM}{meRdu}、{pasaM}{meRdu}のように、それぞれ2つの音調領域から成っており、レキシコンでは[AB型]はLH音調、[C型]はHL音調という音調メロディーが指定されている。そして、それぞれの声調メロディーは、次のように各音調領域と結びついて出現する、と考えた。

(18) 与那覇方言の3モーラ名詞+3モーラ助詞の音調実現

| | |
|-------|-----------------------------|
| [AB型] | {ka ga M} {me R du} … (鏡もゾ) |
| | [μ μ μ] [μ μ μ] |
| | L H |
| [C型] | {pa sa M} {me R du} … (鋏もゾ) |
| | [μ μ μ] [μ μ μ] |
| | H L |

さて、この与那覇方言でも、上述の多良間方言と同様、向格助詞 NkeR、あるいはその助詞から始まる助詞連続 NkeR duが、例外的な振る舞いを見せた。次の例は、与那覇方言の2モーラの名詞に NkeR du (向格NkeR+焦点標識du) という助詞連続が付加したものである。

(19) 与那覇方言の2モーラ名詞に助詞連続 NkeR du が付いた場合の2つの音調型

| | | |
|---------|---------------------|---------------------|
| [A B 型] | saki N keR du (酒にヅ) | fucI N keR du (口にヅ) |
| | bata N keR du (腹にヅ) | sudi N keR du (袖にヅ) |
| [C 型] | funi N keR du (舟にヅ) | nabi N keR du (鍋にヅ) |
| | tagu N keR du (桶にヅ) | usI N keR du (臼にヅ) |

ここで特に注目されるのは、この与那覇方言では向格助詞 NkeR の最初の N が直前の2モーラ名詞とセットになってまとまり、そのまとまりが L 音調、あるいは H 音調を担う単位として機能していることである。

このような現象を解釈するために松森 (2013b) は、与那覇方言では向格助詞 NkeR の最初のモーラ N が、その助詞の頭部から切り離されて先行する名詞と結びつき、「名詞+N」でひとつの「音調領域」を形成する、という仮説を提案した。

これを図式化すると、次のようになる。向格助詞 NkeR の N の部分は、その直前の名詞を中心とした音調領域の内部に含まれて、{saki N}、あるいは {funi N} のようにまとまっていることに注目してほしい。

(20) 与那覇方言の2モーラ名詞+助詞連続NkeRduの音調実現

| | |
|---------|-----------------------------|
| [A B 型] | {sa ki N} {ke R du} … (酒にヅ) |
| | [μ μ μ] [μ μ μ] |
| | L H |
| [C 型] | {fu ni N} {ke R du} … (舟にヅ) |
| | [μ μ μ] [μ μ μ] |
| | H L |

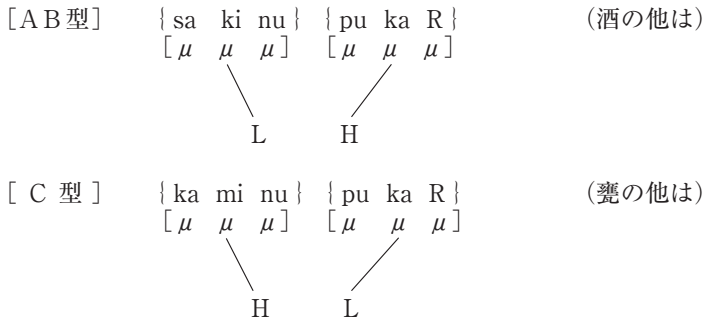
また与那覇方言では、2モーラ名詞に属格の nu (～の) を後続させて句や文を作った場合にも、まったく同様な現象が観察された。たとえば属格助詞 nu を後続させて、2モーラ名詞を「～の他はない ～nu pukaR njaRN」という文に入れてみると、この方言の [A B 型] と [C 型] の2つの音調型は、次に見られるような型で実現した。

(21) 与那覇方言の「～の他はない」という文におけるA B型とC型の区別

| | |
|---------|------------------------------|
| [A B 型] | saki nu pukaR njaRN (酒の他はない) |
| | kabI nu pukaR njaRN (紙の他はない) |
| [C 型] | kami nu pukaR njaRN (甕の他はない) |
| | nabi nu pukaR njaRN (鍋の他はない) |

この(21)で注目されることは、与那覇方言では、属格の助詞 nuがそれに先行する名詞といっしょになってひとつの音調領域を形成し、{saki nu} (酒の)、{kami nu} (甕の) のようなまとまりを構成している、という点である。そのまとまりに、次のようにそれぞれH音調、あるいはL音調が結びついて出現することによって、この方言では2つの音調型の対立がはっきりと出現する。

(22) 与那覇方言の「2モーラ名詞+の他はない ~nu pukaR njaRN」の音調実現



このように与那覇方言では、名詞に向格助詞の NkeR や、属格の nu が後続すると、その NkeR の N の部分や属格助詞の nu が、直前の名詞とひとまとまりとなって「音調領域」を形成し、その音調領域が、各音調を担う単位として機能している、という提案を、松森 (2013b) では行った。

3. 「韻律領域」という概念を採用した多良間島アクセントの分析

さて、与那覇方言で見いだされた上述のような知見を多良間島にも適用すると、第1節で問題提起した多良間島のアクセントにかかわる多くの謎が解けることに気付いた。(多良間島方言を「音調(声調)」体系として記述すべきか否かについては、まだ判断材料が少なく、現時点では断定することができない。したがって以下は、このまとまりのことを「音調領域」ではなく、「韻律領域 (prosodic domain)」と呼んで、議論を進めていくこととする。)

まず(1)～(6)で提示した語例のアクセントについて、「funi (舟)」というc型の名詞を例にとって分析してみよう。まず、この名詞に mai, kara (奪格)、gami du (到格+焦点の du) のような助詞や助詞連続が後続した場合には、次のような「韻律領域」が、その文節内に形成されると考えられる。

(23) 多良間島方言の「舟も」「舟から」「舟からズ」の韻律領域の形成

- { fu ni } { ma i } (舟も)
- { fu ni } { kara } (舟から)
- { fu ni } { gami du } (舟まで+焦点の du)

つまり、これらの文節は、すべて2つの韻律領域から成る音韻構造を持っている。

多良間島では、c型の名詞から始まる文節では、そのH音調はいずれの場合も、次のように

最初の韻律領域に結びついて実現する。この際、H音調は、各韻律領域の後ろから数えて2つ目のモーラに実現するために、この場合は最初の韻律領域 { funi } の [-2]、つまり funi の fu の部分に結びつく。(以下、H音調の結びついたモーラ (μ) に、下線を引いて示すこととする。)

(24) 多良間島方言の「舟も」「舟から」「舟からズ」のH音調実現の仕方

| | | | |
|---------|-----------------------------------|-----------------------|--------|
| [c 型] | { fu ni } | { ma i } | (舟も) |
| | [<u>μ</u> μ] | [μ μ] | |
| | | | |
| | H | | |
| | | | |
| | { fu ni } | { ka ra } | (舟から) |
| | [<u>μ</u> μ] | [μ μ] | |
| | | | |
| | H | | |
| | | | |
| | { fu ni } | { ga mi du } | (舟までズ) |
| | [<u>μ</u> μ] | [μ μ μ] | |
| | | | |
| | H | | |

そのために、これらは fu]ni mai、fu]ni kara、fu]ni gami du のような下がり目を持つことになったと考えられる。

これに対して (7) ~ (10) で見てきた NkeR (向格)、NkeR du (向格+焦点)、nu gami du (~ばかり) などが c 型の名詞に後続した場合には、その韻律領域は、次のように形成されと考えられる。ここでは、向格助詞の NkeR の最初のモーラ N や、nu gami+du の最初の nu の部分が、直前の名詞部分といっしょになってひとつの韻律領域を形成していることが注目される。

(25) 多良間島方言の名詞に NkeR、NkeR du、nu gami du が後続した場合の韻律領域の形成

| | | |
|-------------|-------------|--------------|
| { funi N } | { keR } | (舟に) |
| { funi N } | { keR du } | (舟に+焦点のdu) |
| { funi nu } | { gami du } | (舟ばかり+焦点のdu) |

たとえば c 型の名詞 funi (舟) に「向格+焦点」の助詞連続 NkeR du が後続した場合、与那覇方言と同様に、{ fu ni N } { keR du } のような2つの韻律領域が形成される。そして、(funi は c 型名詞なので) このうちの最初のほうの韻律領域に、H音調が次のように結びつけらる。

(29) 多良間島方言のH音調の実現位置

H音調は、各韻律領域の次末モーラ（[-2]のモーラ）に結びついて実現する。

以下では、あらたに修正された多良間島アクセントに関する一般化（28）、および、それに付随したアクセント付与規則（29）が妥当かどうか、この多良間島の複合名詞のアクセントを使って検討してみよう。

4. 多良間島の複合名詞アクセントによる修正案（28）の検討

この節と次の節で扱う多良間島の複合名詞のアクセントのデータは、2013年11月にあらたな調査を行った際に得られたものである⁸⁾。したがってこの節以降で展開される議論は、第1節において見てきた、多良間島方言アクセント規則の問題点の発見につながるデータを提供してくださった話者とは、異なる話者から得られたデータに基づいている。

結論から先に述べると、多良間島方言の複合名詞アクセントは、松森（2010）の提示した（4）では予測することができず、本稿であらたに提示した（28）の一般化でなければ、正しく予測することができない。以下、この点について論じたい。

第2節で見てきた与那覇方言との比較を容易にするために、当初は多良間島方言のアクセントも、H音調とL音調を使用して記述することを試みた。しかし与那覇方言とは異なり、この多良間島方言では、そのピッチの上がり目の位置は、常に明瞭とは限らず、それがどこにあるのか判断に迷う場合が多い。これに対してその下がり目の位置は、はっきりと聞き取ることができる。（多良間島では、ピッチの「下がり目」の位置が弁別的な特徴ではないかと思われる。）したがって、以下、多良間島方言のアクセント記述にあたっては、松森（2010）の記述方法と同様、そのピッチの下がり目の位置のみに、] という記号を付けて示すだけにとどめておきたい。

さて、与那覇方言と同じく、多良間島方言でもいわゆる「式保存の法則」がきれいに保たれている。つまり複合語のアクセント型は、その前部要素が a、b、c のどの型に所属しているかによって完全に予測することができる。また、複合語から始まる文節全体のアクセント型も、その複合語の前部要素の型から予測することができる。つまり、与那覇方言（松森2013b）と同様、多良間島方言でも、複合語の前部要素が a 型なら、それを先頭にした文節全体も a 型になり、それが b 型なら文節全体も b 型、それが c 型なら文節全体も c 型で現れる。

以下のデータは、「木」を後部要素に持つ複合名詞を「～もある～mai aL」という文に入れて発音してもらった際の、文節部分のアクセント型を示す。

(30) 「木」を後部要素に持つ複合語の例（多良間島方言）⁹⁾

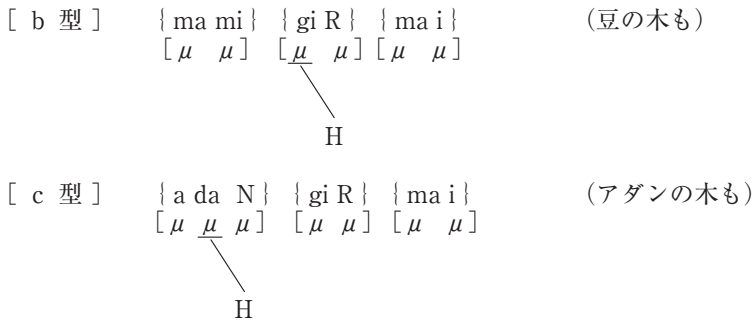
| | | | | | | |
|----|---------|----------|----------|----------|----------|------------|
| a. | kuba | giR mai | （クバの木も） | muM | giR mai | （バンシロウの木も） |
| | sjutacu | giR mai | （ソテツの木も） | jaroR | giR mai | （テリハボクの木も） |
| b. | mami | gi]R mai | （豆の木も） | Mm | gi]R mai | （サツマイモの木も） |
| c. | ada]N | giR mai | （アダンの木も） | gazju]ma | giR mai | （ガジュマルの木も） |
| | basjo]R | giR mai | （バナナの木も） | maNzju]R | giR mai | （パパイヤの木も） |

多良間島では「クバ kuba、バンシロウ muM、ソテツ sjutacu、テリハボク jaroR」は a 型、「豆 mami、芋 Mm」は b 型、「アダン adaN、ガジユマル gazjuma、バナナ basjoR、パパイヤ maNzjuR」は c 型の名詞である。

与那覇方言について松森（2013：79-86）が指摘したように、この多良間島方言でも、複合名詞を構成する「語根」が、ひとつの韻律領域を形成することが分かった。たとえば b 型の「豆 mami」を語根に持つ「豆の木 mamigiR」や、c 型の「アダン adaN」を語根に持つ「アダンの木 adaNgiR」は、それぞれ {mami} {giR}、{adaN} {giR} という 2 つの韻律領域から成り立っていると考えられる。

したがって、それらの複合語から始まる (30) の文節も、{mami} {giR} {mai}（豆の木も）や、{adaN} {giR} {mai}（アダンの木も）のように、3 つの韻律領域から成り立っている。それに (28)、(29) が適用すると、b 型の {mami} {giR} {mai} にはその 2 つ目 の韻律領域の [-2] のモーラに、c 型の {adaN} {giR} {mai} には、その 最初 の韻律領域内の [-2] のモーラに、それぞれ H 音調が、次のように結びついて実現すると考えられる。

(31) 多良間島方言の「豆の木も」「アダンの木も」の韻律領域の形成と H 音調の実現の仕方



このようにして、mamigiR mai（豆の木も）や adaNgiR mai（アダンの木も）の下がり目の位置は決定する。

次に「～畑」という複合名詞から始まる複合語を「～もある ~mai aL」という文の中に入れて発音してもらい、その文節部分を取り出したのが (32) の例である。ここでもやはり複合語の前部要素の型が、文節全体のアクセント型を決定している。

(32) 「畑」を後部要素に持つ複合語の例（多良間島方言）¹⁰⁾

- | | | | |
|---------------------|-----------|------------------|----------|
| a. kuRsju baru mai | (とうがらし畑も) | piL paru mai | (にんにく畑も) |
| b. mugI pa]ru mai | (麦畑も) | mami pa]ru mai | (豆畑も) |
| sjuR pa]ru mai | (葉野菜畑も) | suMna pa]ru mai | (葱畑も) |
| c. tama]na paru mai | (キャベツ畑も) | goR]ra paru mai | (苦瓜畑も) |
| sjoR]ga paru mai | (しょうが畑も) | NnazjuR paru mai | (萓畑も) |

多良間島では、「とうがらし kuRsju、にんにく piL」は a 型、「麦 mugI、豆 mami、葉野菜 sjuR、葱 suMna」は b 型、「キャベツ tamana、苦瓜 goRra、しょうが sjoRga、萓 NnazjuR」は

c型である。これらの名詞を前部要素に持つ複合語から始まる文節の下がり目の位置も、(31)と同じような方法で予測することができる。

次の例は、「甕」^{かめ}「味噌」を後部要素に持つ複合語を、「～もあった ~mai ataL」「～もある ~mai aL」のような文の中で発音してもらった場合の文節部分のアクセント型である。

(33) 「甕」を後部要素に持つ複合語の例 (多良間島方言) ¹¹⁾

- a. mizI gami mai (水甕も) sjaki gami mai (酒甕も)
- Msju gami mai (味噌甕も) cIkimunu gami mai (漬物甕も)
- b. miM ga]mi mai (耳甕も)
- c. upu]sju gami mai (海水用の甕も)

(34) 「味噌」を後部要素に持つ複合語の例 (多良間島方言) ¹²⁾

- a. kacjuR Msju mai (かつお味噌も)
- b. sIma M]sju mai (島味噌も) aVva M]sju mai (油味噌も)
- c. wa]R Msju mai (豚味噌も) zIma]mI Msju mai (ピーナツ味噌も)

この(33)、(34)のデータから、「水 mizI、酒 sjaki、味噌 Msju、漬物 cIkimunu、^{かつお}鯉 kacjuR」はこの方言ではa型に属し、「耳 miM、島 sIma、油 aVva」はb型、「海水 upusju、豚 waR、ピーナツ zImamI」はc型に所属する名詞であることが分かる。この場合も、(31)のような方法を採用することにより、それらの複合語前部要素のアクセント型から、文節全体の下がり目の位置を予測することができる。

さて、ここで特に注目すべき点は、(30)～(34)で挙げられた複合語のうち、b型の複合語の例における下がり目の場所にある。その下がり目はいずれの例においても、「複合名詞の後部要素」に出現していることが注目される。この点から、「b型の下がり目はその名詞の後続する助詞の部分に出現する」とした(4)の一般化は、誤りであったことがはっきり分かる。

もし(4)に従うとすれば、たとえばb型の複合名詞「miMgami (耳甕)」や「sImaMsju (島味噌)」の下がり目は、その複合名詞に後続する「助詞」部分に出現し、それぞれ*miMgami ma]i (耳甕も) や *sImaMsju ma]i (島味噌も) のような型で出現することが予想されてしまう。しかし実際は、これらは miMga]mi mai (耳甕も)、sImaM]sju mai (島味噌も) のような型で出現し、その下がり目は、けっして助詞部分には出現してはいない。

つまり、b型の下がり目の位置は、助詞 (あるいは助詞連続) の部分に出現するのではなく、それぞれの文節の2つ目の韻律領域に出現する、と解釈し直す必要がある。

そのb型の下がり目が出現する2つ目の韻律領域は、「助詞 (あるいは助詞連続)」である場合もあるし、「複合語の後部要素」である場合もある。このようにb型の下がり目の位置は、その文節の2つ目の韻律領域の部分に何が来るかによって、変わってくるのである。

松森(2010)が提示した(4)の一般化は、その2番目の韻律領域がたまたま助詞 (あるいは助詞連続) だった文例だけに基づいて一般化を行ったものであったために、その解釈を誤ったこ

とが判明した。

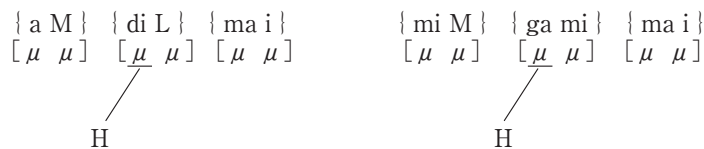
以上のことを考慮すると、(4) は、やはり (28) のように修正しなければならない、ということになる。

さて、ここで、第1節の1.2節で提起された松森 (2010) の記述上の問題点にふたたび立ち戻って考えてみよう。

まず松森 (2010:499-450) では、(12) の aMdiL (網籠) や miMgami (耳甕) を両方とも「c型」の名詞として分類している。これは、これらの名詞に助詞を付けても、aMdi]L mai (網籠も)、miMga]mi mai (耳甕も) のように、その下がり目が常に当該の名詞内部に生じる、という観察にもとづいた分析であった。しかしこの解釈が誤りであったことは、すでにこの節の議論からも明らかであろう。

aMdiL (網籠) や miMgami (耳甕) という語は、実は「b型」の名詞 aM (網) や miM (耳) から始まる「複合名詞」として捉えるべきだったのである。つまりこれらに mai が後続した場合には、以下に示すような3つの韻律領域が形成されるため、たまたまその2つ目の韻律領域にきた複合語の後部要素「籠 {diL}」や「甕 {gami}」の部分に下がり目が出たのだ、と解釈し直さなければならないことになる。

(35) 多良間島方言の**b型**の複合語から始まる文節「耳甕も」「網籠も」内の韻律領域の形成とH音調の実現の仕方



(12) に挙げられた4モーラ名詞のうち、「aMdi]L (漁の時に使う網籠)、miMga]mi (耳甕)」以外にも、「kiRpa]gI (竹馬)、sIru]gi]na (汁用杓子)」などにも同様なことが言えるのではないか。これらも「c型」の単純名詞なのではなく、「b型」の複合名詞である、と捉えなければならないのではないかと思われる¹³⁾。

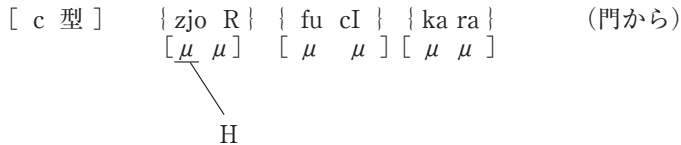
一方、(14) で挙げられた4モーラ以上の名詞 gazju]magiR (ガジュマルの木)、jatu]Rfucu (蓬)、sImi]zdiL (芋弁当の籠)、zjo]Rfuci (門) についても、これらの下がり目が、なぜ [-2] ではなく [-4] の位置に出現するかが、ここで判明したことになる。これらはすべて、c型の名詞をその前部要素に持つ「複合名詞」だと考えればよいのである。

それらの下がり目の位置が [-2] のモーラではなく、それより前のほうのモーラに出現する理由は、①これらの例がすべて複合語であるために (たとえば {gazjuma} {giR} のように) それ自体が2つの韻律領域から構成されていること、そして、②それらがすべてc型であるために当該の文節の最初の韻律領域にH音調が結びついて実現すること、という2つの理由による、と解釈される。

たとえば「zjo]Rfuci kara (門から)」という文節を例にとって考えてみよう。この文節の最初

の名詞 zjoRfucI は、それ自体が複合名詞である。このため、この文節は *{ zjoRfucI } { kara } という2つの韻律領域ではなく、{ zjoR } { fucI } { kara } というような3つの韻律領域から成り立っている、と考えられる。この複合名詞 zjoRfucI は c 型に所属するので、その3つの韻律領域のうちの最初の韻律領域にH音調が実現する。このH音調はその韻律領域の [-2] の位置に、次のように結びつくと考えられる。

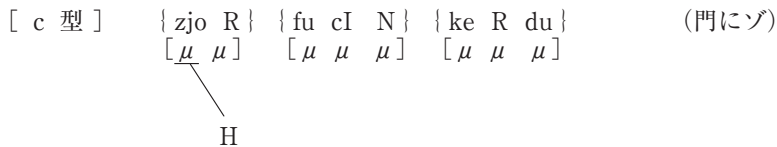
- (36) 多良間島方言の c 型の複合語から始まる文節 zjoRfucI+kara (門から) 内の韻律領域の形成とH音調の実現の仕方



そうするとこの文節は、予想通り zjo]RfucI kara という型で出現する。

さらに、この名詞に「向格のNkeR+焦点のdu」が後続して zjoRfucI NkeR du (門にゾ) となったとしても、その下がり目の位置が後ろにずれていかない理由も、これまでの議論から明らかである。これは、{ zjoR } { fucI N } { keR du } という3つの韻律領域から成り立っているからである。そして、c 型の名詞のH音調は「最初の韻律領域」に出現する、と決まっているために、その下がり目は常に { zjoR } の部分に実現し、NkeR du が後続しても、語末のほうに移動しては行かないのである。

- (37) 多良間島方言の c 型の複合語から始まる文節 zjoRfucI+NkeR+du (門にゾ) 内の韻律領域の形成とH音調の実現の仕方



以上のように解釈すると、(14) で挙げられた4モーラ以上の長い名詞の下がり目が、なぜいつもある特定の位置([-4]や[-3]のモーラ)に固定され、後続する助詞や助詞連続が変わっても、その下がり目の位置がけっして後ろにずれることがないのか、という第1節で提起した問題に対する解答が得られる。gazju]magiR (ガジュマルの木)、jatu]Rfucu (蓬)、sImi]zIdiL (芋弁当の籠)、zjo]RfucI (門) など、(14) に挙げられたすべての名詞の下がり目の位置が、特定の位置に固定して出現しているのには、以上のような理由があるのである。

(14) に挙げられた名詞は、(4) の一般化に基づくとすべて「例外」と見做さざるをえなかったものである。しかし(28)の一般化に基づくと、まさに予測通りの位置に、その下がり目が出現した語例となる。

以上議論してきたことに基づくと、1.2節で提起した、2種類の「籠」(aMdi]L と sImi]zIdiL)の下がり目の位置にかかわる疑問、すなわち、なぜ aMdi]L (漁で使う網籠)は語末から2つ目のモーラに下がり目が出現するのに、sImi]zIdiL (芋弁当の籠)のほうは、語末から数え

て4つ目のモーラに下がり目が出現しているのか、という謎も、解消される。それは、aMdiLは、aM（網）というb型の名詞を前部要素に持つ複合名詞であり、sImizIdiLは、sImizI（芋の弁当？）というc型の名詞を前部要素に持つ複合名詞だからである。両者とも { aM } { diL }、{ sImizI } { diL } のような2つの韻律領域から成るのだが、前者は（b型なので）その2つ目の韻律領域である { diL } の部分に下がり目が出現し、後者は（c型なので）その最初の韻律領域 { sImizI } の部分に下がり目が出現したものと考えられる。

5. 多良間島の複合語に見られるアクセント交替

さて、さきほど第3節で、向格助詞のNkeRのNの部分は、直前の名詞といっしょになって、ひとつの韻律領域を形成する、という提案を行った。この提案が妥当かどうかを検討するために、前節で扱った複合名詞に、この向格助詞のNkeRを後続させて検討してみよう。

前節の(32)で挙げた3種類の型で始まる複合名詞のそれぞれに、NkeRを後続させ、「～に行こう ~NkeR Zzju」のような文に入れて発音してもらおうと、次のような型が出現した。

- (37) 「畑」を後部要素に持つ3種の複合語（多良間島方言）→ NkeRが付加した場合
- | | | | | |
|----|-------------------|-----------|--------------------|----------|
| a. | kuRsju paru NkeR | （とうがらし畑に） | piL baru NkeR | （にんにく畑に） |
| b. | mugI paru] NkeR | （麦畑に） | mami baru] NkeR | （豆畑に） |
| | pana paru] NkeR | （花畑に） | suMna baru] NkeR | （胡瓜畑に） |
| c. | tama]na paru NkeR | （キャベツ畑に） | goR]ra paru NkeR | （苦瓜畑に） |
| | sjoR]ga baru NkeR | （しょうが畑に） | Nnazju]R paru NkeR | （韭畑に） |

ここで特に注目すべきは、b型の複合語の下がり目の位置である。(32)と(37)の例を比較してみると分かるように、ここでも、(8)、(9)で見てきた単純名詞の場合と同じような下がり目の位置の交替が、b型の複合語に観察されることが分かる。

たとえばb型の「麦畑」に「～も」を後続させるとmugIpa]ru maiとその複合名詞の[-2]のモーラに下がり目が出現する((32b)を参照)。これに対して、同じ複合名詞に向格のNkeRが後続すると、mugIparu]NkeRとなり、その下がり目がその複合名詞の[-1]の位置にずれる((37b)を参照)。これがどのような理由によるものかについても、これまでの議論から明らかである。

次の(38)は、b型の「麦畑」とc型の「キャベツ畑」に向格助詞NkeRを後続させた場合の音韻構造を比較したものである。b型の「麦畑」の場合には、H音調がその2つ目の韻律領域 { paru N } の部分に結びつくために、paru (畑) の ru の部分に下がり目が生じる。これに対してc型の「キャベツ畑」の場合は、その最初の韻律領域、つまり { tamana } の部分にH音調が結びつくために、tamana (キャベツ) の ma の部分に下がり目が生じる。

(38) 多良間島の b 型の「麦畑」と c 型の「キャベツ畑」に向格助詞 NkeR が後続した場合の韻律領域の形成と H 音調の実現の仕方

[b 型] { mu gI } { pa ru N } { ke R } (麦畑に)
 [μ μ] [μ μ μ] [μ μ]

H

[c 型] { ta ma na } { pa ru N } { ke R } (キャベツ畑に)
 [μ μ μ] [μ μ μ] [μ μ]

H

後者の場合は、それに「～も mai」を後続させても、「～に NkeR」を後続させても、tama]na paru mai, tama]na paru NkeR du となって、その下がり目の位置は変わらない。

さて、(7)、(8)、(9) ですすでに見てきたように、単純名詞の場合は「fu]ni mai(舟も) ~funi] NkeRdu(舟に)」のように、c 型の名詞に下がり目の位置の交替が観察された。これに対して複合語の場合は、c 型ではなく b 型の場合に、「mugIpa]ru mai (麦畑も) ~ mugIparu] NkeR du (麦畑に)」のように、同じような下がり目の位置の交替が見られた。この理由は、以上の議論から明らかである。

このことは、「水甕」「耳甕」など「甕」を後部要素に持つ複合名詞についても言える。これらの複合語を「～に入れる ~NkeR ZzjiL」のような文に入れて発音してもらえると、次のような型が出現した。

(39) 「甕」を後部要素に持つ 3 種の複合語 (多良間島方言) → NkeR が付加した場合

- a. mizI gami NkeR (水甕に) sjaki gami NkeR (酒甕に)
 Msju gami NkeR (味噌甕に)
b. miM gami] NkeR (耳甕に)
c. upu]sju gami NkeR (海水用甕に)

ここでも b 型の複合語の下がり目の位置が、(33) の場合とは異なっていることが注目される。miMga]mi (耳甕) の下がり目は、mai や kara を後続させると miMga]mi mai (耳甕も)、miMga]mi kara (耳甕から) のようにその名詞の [-2] のモーラに出現するのだが、それに向格助詞の NkeR を後続させると、miMgami] NkeR (耳甕に) のように、下がり目とその複合名詞の [-1] の位置にずれる。

同様に、「かつお味噌」「油味噌」など「味噌」を後部要素に持つ複合名詞に、向格の NkeR を後続させて、「～に入れる ~NkeR ZzjiL」のような文の中で発音してもらっても、同じような現象が b 型に観察された。

(40) 「味噌」を後部要素に持つ 3 種の複合語 (多良間島方言) → NkeR が付加した場合

- a. kacjuR Msju NkeR (かつお味噌に)

- b. sIma Msju] NkeR (鳥味噌も) aVva Msju] NkeR (油味噌に)
 c. wa]R Msju NkeR (豚味噌に) zIma]mI Msju NkeR (ピーナツ味噌に)

ここでも b 型の複合語 sImaM]sju (鳥味噌)、aVvaM]sju (油味噌) の下がり目の位置 ((34b) を参照) が、sImaMsju] NkeR (鳥味噌に)、aVvaMsju] NkeR (油味噌に) のように、その複合語の [-1] のモーラのほうに移動していることが分かる。

これら (39) や (40) に挙げられた例の中の b 型 の複合名詞の下がり目の位置も、これらがすべて、{ miM } { gami N } { keR } (耳甕に) や { sIma } { Msju N } { keR } (鳥味噌に) のような、3つの韻律領域から成り立っている、と想定すれば説明できる。

さて、最後に (15)、(16) で見てきた aMdi]L (漁用の網籠) と sImi]zIdiL (芋弁当の籠) の下がり目の違いの問題について、あらためて検討してみよう。これらが mai や kara が後続した場合に次のような型で出現する理由については、すでに第 4 節で論じた。

(42) 多良間島方言の aMdi]L と sImi]zIdiL のアクセントの違い

- aMdi]L (漁に持っていく網籠) ~ aMdi]L mai (網籠も)、aMdi]L kara (網籠から)
 sImi]zIdiL (芋弁当の籠) ~ sImi]zIdiL mai (弁当籠も)、sImi]zIdiL kara (弁当籠も)

これらは両者とも複合名詞なので、それ自体が 2 つの韻律領域から構成されている。しかし、aMdi]L (漁用の網籠) のほうは b 型 で、sImizIdiL (芋弁当の籠) のほうは c 型 である、という違いがあるため、前者は [-2] のモーラに、後者は [-4] のモーラにその下がり目が出現し、(42) に見られるような異なるアクセント型になったと考えられる。

この 2 つの複合語の違いは、両者に向格助詞の NkeR を付けて見ることによって、いっそう明瞭になる。NkeR を後続させると、b 型の aMdi]L の下がり目の位置は語末のほうに 1 モーラ分ずれていくのに対して、sImi]zIdiL の下がり目の位置は mi の部分より後ろに移動することがない。

(43) 多良間島方言の aMdi]L と sImi]zIdiL に向格助詞の NkeR が後続した場合の下がり目の位置

- aMdi]L NkeR (網籠に) 対 sImi]zIdiL NkeR (弁当籠に)

この理由も、ここまでの考察で明らかである。これらは、両者とも次の (44) に示されたように、3つの韻律領域から成っている。このうち aMdi]L のほうは b 型なので、3つの韻律領域のうち 2 つ目の [-2] のモーラ、すなわち { diL N } の L の部分に H 音調が結びつく。これに対して sImizIdiL のほうは、最初の韻律領域の [-2] のモーラ、すなわち { sI mi zI } の mi の部分に H 音調が結びつく。

(44) 多良間島方言の aMdi]L(漁のための網籠)と sImi]zIdiL(芋弁当の籠)+ 向格助詞 NkeR
 における韻律領域の形成とH音調の実現の仕方

「網籠に」(b型)の場合

$$\begin{array}{ccc} \{a M\} & \{di L N\} & \{ke R\} \\ [\mu \mu] & [\mu \underline{\mu} \mu] & [\mu \mu] \end{array}$$

H

「芋弁当の籠に」(c型)の場合

$$\begin{array}{ccc} \{sI mi zI\} & \{di L N\} & \{ke R\} \\ [\mu \underline{\mu} \mu] & [\mu \mu \mu] & [\mu \mu] \end{array}$$

H

このような理由から、向格助詞 NkeR が後続した場合の両者の下がり目の位置が、前者 (aMdi]L) の場合は、後ろのほうに1モーラ分ずれていくが、後者 (sImi]zIdiL) の場合は交替しない、というような違いが出現する、と考えられる。

6. 結論

以上、本稿では、松森 (2010) の提案した多良間島のアクセントについての一般化 (4) の問題点を指摘することから議論を始め、その修正版 (28)、(29) を提示した。

その際の重要な手がかりとなったのは、宮古島の与那覇方言の「音調領域」形成の仕方である。本稿では、与那覇方言と同じような韻律領域の形成の仕方を、多良間方言にも想定することによって、松森 (2010) の段階では解消されずに残されていた、この方言のアクセントの記述上の問題点が解決できることを論じた。

さてここで明らかになった重要な点は、宮古島の与那覇方言と多良間島方言が、まったく同じような韻律領域の区切り方を示している、という点である。

この2つの方言は、両者とも3型アクセント体系を持っはいるものの、その表面のピッチパターンの実現の仕方だけに着目すると、かなり異なっている。それにもかかわらず、両者には同じような音韻の単位—すなわち「韻律領域」—が存在すると想定できる。つまり、(その表面の相違にも関わらず) 与那覇方言と多良間島方言には、共通した性質が見られることが、本稿で明らかにされた。

このように、ピッチパターン実現のための音韻単位である「韻律領域」が、両者に共通して存在している、という事実は、この2つの言語体系が分岐する前の体系(宮古祖語である可能性もある)に、すでにこの単位が存在していた可能性をも示唆している。このことは、通時的にも意味ある発見だと思われるが、この点についての議論は、また別の機会にあらためて行うこととしたい。

注

- 1) 本稿は、主として1995年3月、1999年12月、および2013年11月に多良間島で行われたアクセント調査で得られたデータの分析結果に基づいている。熱心に多良間島方言をお教えいただいた話者の皆様、そしてお世話いただいた多良間村教育委員会の皆様に、この場を借りて篤く御礼申し上げます。なお本研究は、科研費補助金基盤研究A（課題番号22242011）「日本語のアクセントとアクセント類型論」（研究代表者 窪蘭晴夫）の助成を受けている。
- 2) 本稿の第1節で行う問題提起は、主として1995年3月と1999年12月に行われた調査で得られたデータに基づくものである。これら過去2回の調査では、以下の6名の方々に多良間島方言のアクセントをお教えいただいた。以下、氏名、性別、生年月、出身集落の順に記す。（なお、これらの調査では公表の許可をいただかなかつたため、個人名については匿名とし、以下には記号で示すこととする。）OS氏（男性、大正6年（1917年）3月、仲筋）、IJ氏（男性、大正14年（1925年）2月、仲筋）、IT氏（女性、昭和2年（1927年）12月、仲筋）、SY氏（女性、大正7年（1918年）10月、仲筋）、HJ氏（男性、大正10年（1921年）11月、塩川）、SC氏（男性、大正11年（1922年）10月、塩川）。話者の皆様に、あらためて感謝いたします。
- 3) この中の「筧」という語は、仲筋ではsjaukiと発音されたが、ここでは塩川の語形のほうを載せてある。以下、このような集落による違いが観察された場合は、すべて塩川の集落の語形のほうに統一して記述する方針とした。同じく（10）に挙げられた「筧」も仲筋では pauki、（14）に挙げられた「門」も仲筋では zjaufuciとなるが、本稿の中では、すべて塩川の語形のほうに統一してある。
- 4) このようなアクセント型を持つ名詞が多良間島方言に存在することは、青井（2012：10）によっても指摘されている。青井（2012）では、ma]kugaN（ヤシガニ）という4モーラ語の下がり目の位置が[-4]であることを指摘し、この理由を、c型の名詞は「当該名詞の1フット目の次末モーラでピッチが下降する」から、と説明している。

これに対して、（後述する）本稿の解釈では、この名詞がこのような[-4]の位置に下がり目を持つことになったのは、それがc型の「複合名詞」だから、と説明される（第4節を参照）。しかしその場合、maku-gaNの前部要素のmaku-とは、いったい何なのか。これは、ひとつの語根であると考えてよいのかが、問題となる。一方、その後部要素は「kaN（蟹）」である、と考えられる。ただし、「蟹」を意味するkaNは、多良間島では使用されていないようだ。
- 5) この下がり目はs]midil mai（弁当籠も）のように、前のほうにずれることさえある。
- 6) 青井（2012：11）は、多良間島方言では主格の助詞nuを名詞に後続させた文節でa型とb型が中和し、どちらも同じアクセント型で出現することを報告している。たとえば、a型のjuda（枝）とb型のjadu（戸）に、「～がない nu neen」を後続させると、juda=nu neen.（枝がない）、jadu=nu neen.（戸がない）となり、どちらの文節内にも、下がり目が出現しないことが報告されている。

つまり、主格助詞nuは、直前の名詞といっしょになってまとまりを成しているのだが、このことから、本稿で論じたような「韻律領域」の形成の仕方をするのは（属格助詞のnuに限らず）多良間島のすべての1モーラの助詞に共通した特徴なのではないかと考えられる。

ちなみに本稿の（28）の一般化をこの場合に適用して説明するとすれば、b型の「戸」から始まる文節「jadu nu（戸が）」に下がり目が出現しないのは、nuが（1モーラであるために）直前の名詞とともに{jadu nu}のように最初の韻律領域に組み込まれてしまうため、と考えることができる。つまりこの文節内には、（本来b型のH音調が結びつくべき）2つ目の韻律領域が、そもそも存在しない。そのためその下がり目が実現しないのだ、と解釈することができる。
- 7) 多良間島方言の3種の型のうち、松森（2010）で「平坦な音調型を持ち、どこにも下がり目が出現しない」と記述されているa型には、実は、ある条件のもとに下がり目が出現する場合がある。そのひとつの条件は、複合名詞に入格（illative）の助詞NkaN keが後続した場合である。たとえばa型の複合名詞を「～の中に落とす NkaN ke utIsji」のような文に入れて発音してもらうと、mizI

gami Nka]N ke (水甕の中に)、sjaki gami Nka]N ke (酒甕の中に) というように、入格助詞内部に、はっきりと下がり目が出現する。この点についての詳しい考察と議論は、別稿にゆずりたい。

- 8) 今回の調査で、多良間島方言を熱心にお教えくださったのは、次の6名の方々である。

| 集落 | 氏名 (敬称略) | 生年月 |
|----|----------|------------------|
| 塩川 | 池間 和彦 | 昭和10年 (1935年) 2月 |
| 〃 | 池間 初江 | 昭和19年 (1944年) 5月 |
| 〃 | 垣花 昇一 | 昭和28年 (1953年) 3月 |
| 〃 | 照屋 清仁 | 昭和4年 (1929年) 4月 |
| 〃 | 野原 博 | 昭和16年 (1941年) 1月 |
| 〃 | 野原 正子 | 昭和18年 (1943年) 2月 |

話者の皆様、また、話者をご紹介下さった多良間村教育委員会の皆様にも篤く御礼申し上げます。

- 9) これらの複合名詞の単独のアクセント型は、次の通りである。kubagiR (クバの木)、muMgiR (パンシロウの木)、sjutacugiR (ソテツの木)、jaroRgiR (テリハボクの木)、mamigi]R (豆の木)、Mmgi]R (サツマイモの木)、ada]NgiR ~ adaN]giR (アダンの木)、gazju]magiR (ガジュマルの木)、basjo]RgiR (バナナの木)、maNzju]RgiR (パパイヤの木)。なお、「バナナの木」はbasjo]giR、「パパイヤの木」はmaNzju]giRのように前部要素が短くなることもあった。ちなみに「テリハボクの木」をjaraugiRと発音する話者も、多良間島にはいるそうであるが、これはおそらく仲筋集落の話者のことではないかと思われる(注3参照)。
- 10) これらの複合名詞の単独のアクセント型は、調査をしていない。なおこれらの例の場合、kuRsju baru (とうがらし畑)のように複合語内部に連濁が生じる場合と、piL paru (にんにく畑)のようにそれが生じない場合があったが、その条件は今のところ不明である。同じ複合語が、後ろに来る助詞が変わることによってkuRsju paru や piL baruとなることもあった。これらに連濁が生じるかどうかは自由変異なのではないかとも思われるが、それについても現時点では不明とせざるをえない。
- 11) これらの複合名詞の単独のアクセント型は、次の通りである。mizIgami (水甕)、sjakigami (酒甕)、Msjugami (味噌甕)、miMga]mi (耳甕)、upu]sjugami (海水用甕)。(なおcukimunugami (漬物甕)の単独形のアクセントは、未調査である。)
- 12) これらの複合名詞の単独のアクセント型は、次の通りである。kacjuRMsju (かつお味噌)、sImaM]sju (島味噌)、aVvaM]sju (油味噌)、wa]RMsju~waR]Msju (豚味噌)、zIma]mIMsju~zImam]Msju (ピーナツ味噌)。
- 13) これに対して、「junaga]tu (夜)、jusjara]bi (夕方)、sItumu]ti (朝)」などは、c型の単純名詞であると考えてもよいのではないかと思われる。

参考文献

- 青井隼人 (2012) 「宮古多良間方言の三型アクセント体系」『2012年度 第26回 日本音声学全国大会予稿集』7-12. 日本音声学.
- 五十嵐陽介 (2012) 「南琉球宮古語与那覇方言の名詞アクセント体系：初期報告」『国立国語研究所共同研究報告12-02 消滅危機方言の調査・保存のための総合的研究 南琉球宮古方言調査報告書』53-68. 東京：国立国語研究所.

Matsumori, Akiko (2001) Historical Tonology of Japanese Dialects. Shigeki Kaji (ed.). *Proceedings of the Symposium: Cross-linguistic Studies of Tonal Phenomena: Tonogenesis, Japanese Accentology, and Other Topics*: 93-122. Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA) : Tokyo University of Foreign Studies.

松森晶子 (2010) 「多良間島の3型アクセントと『系列別語彙』」上野善道 監修 『日本語研究の12章』 490-503. 東京：明治書院.

松森晶子 (2013a) 「宮古島与那覇方言のアクセント交替－3モーラのフットを持つ方言－」『日本女子大学紀要 文学部』62：1-21. 日本女子大学文学部.

松森晶子 (2013b) 「宮古島における3型アクセント体系の発見－与那覇方言の場合－」『国立国語研究所論集』6：67-92. 国立国語研究所.